

独断

注目商品

REVIEW

トマトの観光農園、へたなし出荷、これまでの常識を変える栽培技術

栽培技術

ミニトマトのソバージュ栽培



■お問い合わせ
 バイオニアエコサイエンス(株) 園芸種子部
 〒105-0001
 東京都港区虎ノ門3-7-10 ランディック虎ノ門ビル7F

8月5日に明治大学農学部で「ソバージュ栽培は儲かるのか？」というテーマのトマトの栽培講習会が開かれた(注1)。栽培体系、全国の事例と市場での評価などが紹介され、栽培圃場を見学させてもらった。2010年に秋田県横手試験場で開発されたソバージュ栽培は、全国の生産現場に広がり始めている。

管理作業の手間と時間が激減

「ソバージュ」とはフランス語で野生的という意味で、極力人間の手を加えずにトマト本来の自然な姿で栽培する方法にその名がついた。施設園芸の代表格であるトマト栽培は、一般的には1本仕立てで、芽かき、葉かき、誘引といった管理作業に時間をかけて、甘くて食感の優れたトマトを収穫する。一方、ソバージュ栽培は露地や雨よけ栽培で、キュウリ用のネットに誘引し、初期生育時を除いて、管理作業はほぼ行なわない。

これまでのミニトマト栽培が抱えていた「作業時間が長い」「施設な

どのコストが高い」「高温に弱い」といった課題を克服する技術である。とはいえ、ハウス内とは違って、露地栽培ゆえに天候の影響を受けやすい。1株当たりの着果数が多いうえに一時期に収穫が集中する。同大学の調査では、総作業時間は変わらないが、管理作業の時間が激減し、収穫に時間がかかるそう。講習会に参加した松村竹仁美さん(東京都清瀬市)によれば「今年から挑戦してみたところ、予想以上に収量が多くて驚いた。品種も複数試しているが、増やしていた出荷先でも間に合わない」という。

へたなしトマトは収穫しやすいだけでなく、調理前の作業も少なく済む。生食用の需要が多くを占める日本のトマト需要だが、さらなる需要拡大にかかせない加工用・加熱調理用の品種はまさにソバージュ栽培と相性が良いというわけだ。同時期に大量にとれすぎるという問題には、工夫が必要である。たとえば、収穫時期にお客様を圃場に招いて収穫してもらおう観光農園の発想は、支柱の内側からも収穫できるので親子連れには好評だという。

(加藤祐子)

■ソバージュ栽培の特徴

栽培密度	10a当たり 500～600株(従来:600～2,000株) 株間は80～100cm、条間・うね間は220cm
管理作業	交配・灌水はほぼ不要 芽かき・葉かき・誘引は初期生育時のみ
特徴	・C/N比、シンク(芽や実)&ソース(葉や根)、窒素とカルシウムのバランスがとりやすい ・収量性が高い(ロソナポリタン:4.5t/10a)
問題点	・台風や大雨など天候の影響を受けやすい ・黄化葉巻病の発生している地域には向かない

注1: 神奈川県川崎市農業振興センターと明治大学農学部農学科野菜園芸学研究室が主催したもので、地元の農家ら200名余りが参加した。
 ★Facebookグループ「トマトのソバージュ栽培を考える会」は現場の情報交換の場に。どうぞご参加ください。